

すっぱい ロクスケ

木島始作
梶山俊夫 絵



913/ すっとびロクスケ

156pp/20cm/A 5 判変型

作者紹介

1928年京都に生まれる。東京大学英文科卒業。著書に、詩集『あわていきもののうた』（晶文社）『もりのうた』（佑学社）、童話集『あそびあいてはおばあさん』（岩波書店）、少年小説『考えろ丹太!』（理論社、講談社文庫）、絵本『かえるのごほうび』（福音館書店）、『こびとのこぎり』（童心社）、掌篇小説集『はなしが降ってきた』（筑摩書房）、評論集『日本語のなかの日本』（晶文社）など、訳書に、『ジャズ・カントリー』（晶文社）『ラングストン・ヒューズ詩集』（思潮社）童話『魔法の木』（富山房）など多数がある。

1980年6月25日 第1刷発行

著者 木島 はじめ

装画 梶山 俊夫

発行者 布川 角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

TEL 03-291-7651(営業)

294-6711(編集)

振替 東京6-4123

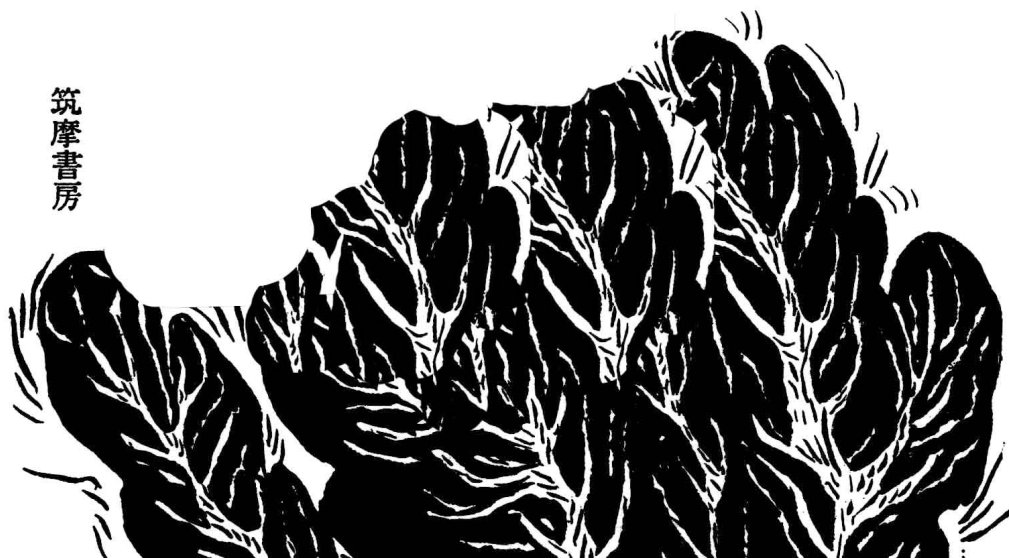
厚德社 積信堂

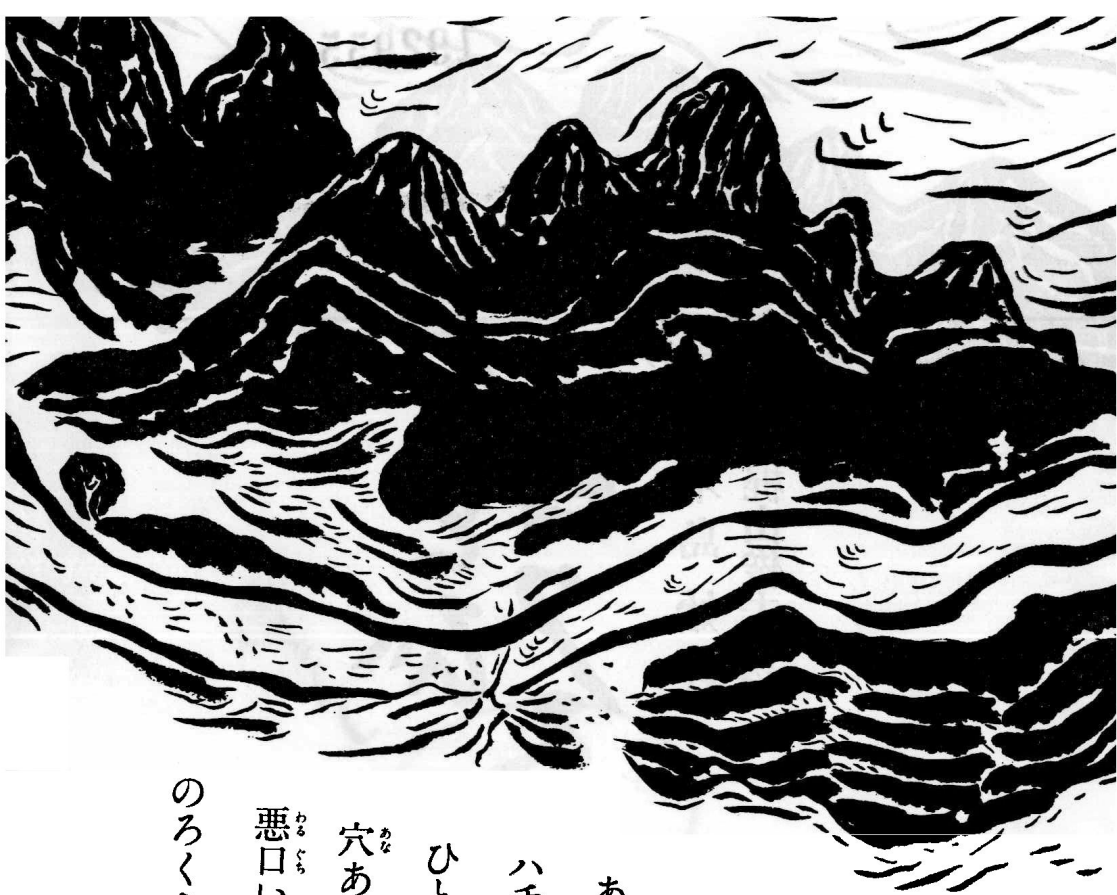


すどひ
ロクス

木島始作
梶山俊夫 絵

筑摩書房





もくじ

あつというまに 7

ハチのとげ 11

ひとの知らない道 19

穴^{あな}あき石ころ 23

悪口^{わるぐち}いわれるほど飛びあがる

のろくさじいさんハゲ山へ 45





すばらしい見はらし

52

谷底^{たにそこ}から口笛^{くちぶえ}が……

64

地図のしるし

86

マヨイの森の岩かげ

93

登り^{のぼ}、また登り^{のぼ}

109

ほら穴^{あな}の奥^{おく}からのひびき

120

くらやみに火の文字^{ふのふ}が……

129

もしも人間のしわざなら

144

あとがき

155





あっというまに

ロクちゃんは、かくれんぼの名人だ。

かくれんぼをして、あそんでいるとき、ロクちゃんが、とうとう見つからずじまいになったことがあった。

どこをさがしても、ロクちゃんが出てこないものだから、おタエも、シュウヘイも、くたびれてしまい、ミユキやケンといっしょに、どこかへかくれてしまったロクちゃんを、ほったらかしにして、家へ帰ってしまったのだ。

「シュウちゃん、見つけた！」

鬼おにになった子は、いつも、シュウヘイのかくれるところなら、たいてい、すぐ見つけられる。

というのは、シュウヘイのかくれるところは、きまっていて、ひっそりしたところ、ふといマツの木のかげとか、ススキのしげみのまんなかだからだ。

「おタエ、おタエ、出ておいで」

タエコも、すぐ見つかるほうだった。

というのは、頭や、体はかくしても、タエコは、足をかくさなかったり、ごそごそ音をたてたりしてしまうからだ。

しかし、ロクスケは、ちがっていた。

なんといったって、ロクスケは、足が速い^{はや}ので、あつというまに、みんなの目に見えないところに、走っていつてしまうのだ。

それで、かくれんぼをして、みんなに、見つけられずじまいになって、ロクスケは、あくる日、どこにかくれていたのか、聞かれることになった。

「ロクちゃん、いったい、どこにかくれていたの?」

タエコが、そう、たずねた。

「そんなの、いえるもんか」

ロクスケは、すましていた。

「ずるいよ、遠くへいったら。それじゃかくれんぼに、ならないよ」

シュウヘイが、あてずっぽをいって、ロクスケをせめたてた。

「いいや、近くにいたんだよ」

ロクスケは、あくまで、そういった。

「うそだ」

「うそに、きまつてる」

まわりから、そういいたてられて、ロクスケは、こまった顔をちょっとしたが、すぐポケットから、クリのいがをとりだして、こんなことをいった。

「これ、きのう、かくれているあいだに、ハチがくれたんだ」

タエコは、きょんととして、いった。

「なあに？ それ、なんのこと？」

すると、ロクスケは、まじめくさった顔をして、こういった。

「ほら、あそこ、あのマンサクじいさんののきしたに、大きなつぼが、ゆうべまであったの、おぼえてない？」

ロクスケが指さしたほうを、みんなで、見た。

マンサクじいさんの大きな家ののきしたには、なんにもなかった。しかし、大きなつぼのかたちが、かべのうえに、うすい色になってのこっているの、なんだかそこに、大きなつぼがあったような気が、タエコにも、シュウヘイにも、してくるのだった。

「ほら、あったろ、大きいつぼが」

「そうだったかなあ」

「そうかもね」

そのマンサクじいさんののきしたの大きいつぼにかくれていたら、ロクちゃん
は、いつのまにか、つい、いねむりをしてしまい、鬼おにに見つからずに、ごろごろ
っと、ころがされていったらしい、というのだった。

ハチのとげ

大きなつぼにかくれて、あんまり鬼^{おに}が見つけにこないものだから、ロクスケは、いねむりをしてしまい、そのあいだに、いつのまにか、つぼごとこころがされていて、いい気もちで、ゆらゆらゆれていたんだ、というのだった。

ごとりん ごとりん つぼをのせ

ごとりん ごとりん くるまごと

ルンルン ルンルン どこかしら

ごとりん ルンルン いっちゃった

つぼが、ごろんところがったはずみで、ロクスケは、目をさましたんだそうだ。

「あれっ、ここはいいたい、どこなんだって思ったよ。

暗いなかで、フクロウが目をひかせているし、葉っぱがごそごそ動いているし、ぼくは、まわりじゅうと、にらめっこ。こんなところに来たことないぞって、思ったな。

ハチが一びき、つぼのなかにいるぼくに、ずうっとついてきてね、ルンルン、ルンルン、うなってるので、ぼくは、ポケットにいれといたクロザトウのあめを、なめさせてやったよ。

するとね、ハチがどうも、こういつてるみたいだったんだ。

『じいさんが、ルンルン、じいさんが、ルンルン、にげたウシを追いかけてるよ』

見ると、それは、ほんとうだった。マンサクじいさんがね、ウシのあとを、のろくさ、のろくさ、追いかけているのさ^{*}

「ちょっと、まって」

と、おタエがいった。タエコは、だれよりも知りたがりやで、へんなことを、ほうっておかない女の子だった。

「夜になって、くらかったんでしょ。どうして、そんなの見たの、ロクちゃん？」

「それがね、いつのまにか夜じゃなかったんだよ。明るくなってたんだもの」

「ふうん、ロクちゃんの夜は、すぐ朝になるの？」

と、おタエは、ロクスケの顔をみて、からかうようにいった。

「だって、ぐっすりねたら、だれだってそうだろう」

と、ロクスケはすましていった。

「そう、それは、そうね」

と、すましやのミユキがいったので、ロクスケは、はなしつづけた。

「まあ、お聞きよ。それでね、ハチがね、こういつてるみたいだったんだ。『マンサクじいさんに、そのウシつかまえるの、まかしてくれって、おいしい』って。」

それで、ぼくは、『じいさん、そのウシ、つかまえてあげるよおっ』て、いっちまったのさ。

それで、マンサクじいさん、安心して、のろくさ、のろくさ、しりもちついて

しまった。

ハチはね、どうやら、ウシのほうにとんでいって、ウシくん、ウシくん、クリのみを、いっぱい食べられそうだよって、いったんだろうね。

ウシは、ドゥーンとひとつき、クリの木につきあたり、クリのみがいっぱい落っこちてきた。

しかし、ウシのつのが、クリの木にはさまって、ぬけなくなっちゃった。

マンサクじいさんは、これを見て、腰^{こし}をまげて、おおよろこび、『ついでにそのウシのちちしほりもやってくれ』って、いうのさ。



ぼくは、『おれいにクリをおくれ』っていって、じいさんのたのみどおり、ちちしほりをやったのに、マンサクじいさんたら、ひとつのこらず、クリのをももって帰ろうとするのさ。

それを見て、ぼくよりさきに、ハチがね、とんでいって、マンサクじいさんのほっぺを、ちくりっと、さしたんだ。

ほっぺをさされて、マンサクじいさん、とびあがって、痛^{いた}がった。

ぼくは、クリのいがを、うまくつまんで、ひょいとマンサクじいさんの首すじめがけて、なげつけてやった。

じいさん、いつもみたいに、そのときは、のろくさしてなかったよ」

「ふうん、で、ウシはどうしたの？」

と、おタエが、ふしぎがって、きいた。

「そうなんだよ。ウシのつのをクリの木からはすすのが、たいへんでね。みんなに手だすけしてもらったのさ」

と、ロクスケは、ほんとにたいへんそうに、いった。

「みんなって、ほかに、だれかいいたの？」

と、おタエは、つづけて、きいた。

「うん。ほら、リスだとか、ノネズミだとか、手つだえるものはみんなだよ。クリの木のあたりには、ほら、いるだろ、いろいろ。

それで、ウシのほうは、つのがはずれて、けがひとつ、しなかったんだけど、ハチがねえ……」